

## 序章 分析の枠組み

講義の課題：帝国に対してギリシア人がどのように対応したのか。

帝国を存続させたのは何か。

帝国の意味

対象：都市から個人のレベルまでの次元

帝国との同盟の可否（政策）

帝国の宗主権を承認するか否か（政策）

帝国に好意的か敵対的か（イメージや感情）

周辺諸民族との関係

異民族の脅威に対して民族的に大同団結する伝統の欠如

ギリシア世界の空間的広がり→現地住民との関係

多元的な関係の存在

ギリシア都市に対する間接統治の形態

特に都市有力者を介して

外部世界に対して開放された世界を形成

外部世界からの文化的影響

前七世紀の「東方化時代」

オリエントの意匠やモチーフ

下半身が動物の身体をした神々の像：小アジア

グリフィンやライオン（王権を象徴するもの）

前五世紀

ベンディス神

トラキアからアテナイへ

ペルシア文化

傭兵としての文化的接触

サイス朝エジプト：アブシンベル寺院の落書き

ペルシア人に仕えるギリシア人の存在

傭兵：西方におけるペルシア軍の重要部分を占める

医師：デモケデスやクテシアス

側近：ヒスティアイオス

ギリシア人政治家による接近

ノティオンの事例：ピッストネスに接近

政治的亡命者：ドリエウスやヒッピアス、テミストクレ  
ス

アルキビアデスやリュサンドロス、アンタルキダスなど

ポリスの次元での接近

ペロポネソス戦争中のスパルタとアテナイ

前四世紀：スパルタ、アテナイ、テーバイ

王の勅令を求める

異民族の脅威に対抗する同盟結成の動き

デロス同盟：ペルシアに対する報復を目的

アゲシラオスの小アジア遠征

ギリシア世界の中の帝国と都市

異民族に対する軍事行動の背景：指導権、忠誠の確保が目的

アテナイ：デロス同盟のアテナイ帝国化＝同盟国の奴隷化

貢税と艦隊、エピスコポイやアルコン、法廷、度量衡の統合

スパルタ：リュサンドロスの帝国

デカルキア体制←リュサンドロスの仲間

貢税と艦隊、ハルモステスや駐留部隊

スパルタ帝国という呼称

第二アテナイ海上同盟条約文中の文言：

「ラケダイモン（即ちスパルタ）の人々はギリシア人が  
自由と自主独立と平和に暮らし、彼等の全てが確実に領土  
を保持するがままにしておいてくれますように」

同盟国間の連帯の希薄さ

タソスやサモスの離反→多くは単独行動

ミュティレネ事件：ポリスの中の対応も一様でない

アテナイに離反の動きをリークするもの

離反指導者に反抗、降伏を求めるもの

↓

ディオドロス：民衆はアテナイの味方  
スパルタ帝国の事例：レウクトラ以降  
各地で民主派の革命、アルカディア連合の結成、ボイオティア連合軍の侵攻という状況の出来  
コリントやプレイウスなどの諸都市：スパルタとの連携維持

↑

民主派亡命者に対する危惧の念

## 政治行動の規範

政治行動の規範は何か

原理・原則が存在していたのか

ヘレネスとバルバロイという二項対立的な規範の是非  
ポリスの自由と自治という理念は絶対的か

近代歴史学の考え方

ポリス共同体とギリシア民族共同体への共属意識は絶対的  
政治的自由＝異民族に対する文化的優越性の根拠

ホールの研究：ペルシア戦争以降の時期に拡大

J. M. Hall, *Hellenicity: Between Ethnicity and Culture*,  
Chicago/ London, 2002.

ギリシア人：「智 (sophia)」、「勇気 (andreia)」、「正義  
(dikaiosyne)」

バルバロイ：「愚かしさ (amathia)」、「怯弱 (deilia)」、「不正  
(adikia)」

バルバロイとの共存は不可能

ペルシアへの協力は裏切り

キモンの遠征、カリアスの平和、カッリクラティダスの英断、  
アゲシラオスの小アジア遠征・・・ギリシア人の栄光

ペルシア王の使節の通訳を務める事、パウサニアスの行為、

コリント戦争の勃発、アンタルキダスの平和・・・裏切り  
これらの判断に絶対的基準があるわけではない

ペロポネソス戦争期における両交戦国の行動

小アジアの諸都市に対するペルシア王の宗主権を承認

コノンのクニドス海戦の勝利を称賛

レウクトラの後テーバイはペルシア王の権威を利用して

平和を実現しようとした

バルバロイとの対峙でなく、別な価値基準の存在＝ポリスの利益

デロス同盟諸国を結束させる為の手段

だからこそ、ペロポネソス戦争が始まると戦争に勝つ

為にペルシアに接近しようと試みる

前4世紀になるとコイナー・エイレネを引き出すことを名

誉とする

↑

当該のポリスの利益

何が国益か？

ポリス内部の党派：有力政治家を核に結ばれる私的なつながり

政治理念と政策、権力志向を共有

それぞれの党派が自らの利益をポリスの利益に置き換える

テーバイのレオンティアダス：スパルタ軍を引き入れる

テゲアの民主派：マンティネイアの軍を招く

コリントスの民主派：アルゴスとの合同

党派の利害がポリスの利害に擦り変えられている

↓

アテナイ帝国をめぐる論争

アテナイやスパルタなどのギリシア世界の中にある都市だけでなく、ギリシア世界の外にあるペルシアですらギリシア人たちはポリス内の権力闘争の駒として取り込み、積極的に利用していったのである。

サント=クロワ：G. E. M. de Ste Croix, “The Character of the

Athenian Empire” , *Hist.* 3, 1954/55, pp. 1-41.

民主派と寡頭派の対立

前者は親アテナイ政策を、後者は親スパルタ政策を推進  
少数である富裕市民と多数を占める貧民大衆との階層対立  
富裕市民：自らの利害を守るために寡頭派に結集してスパ  
ルタとのつながりを求める

民衆：同じ市民仲間の富裕者の抑圧を免れるために民主派  
を支持し、アテナイを自分たちの擁護者と見なす

ブラディーン/クイン：

D. W. Bradeen, “The Popularity of the Athenian Empire” ,  
*Hist.* 9, 1960, pp. 257-269; T. J. Quinn, “Thucydides and  
the Unpopularity of the Athenian Empire” , *Hist.* 13, 1964,  
pp. 257-266.

民衆：アテナイの帝国政策を支持せず

民主派：少数派

久保正彰、「内乱の思想 -文学者の歴史研究-」、『成蹊大学文  
学部紀要』二、一九六六年、百五十六-百八十四頁  
対外政策をめぐる深刻な対立

田中美知太郎、『ツキュディデスの場合』、筑摩書房、一九七〇年、  
百三十一-百五十六頁

↑

トゥキュディデスの「内乱の省察」(Ⅲ. 82-84) の記述に  
強く影響を受けている

論争の遺産

論争はブラディーン・クイン優勢

サント=クロワの評価点：富裕者と貧民というポリス社会の構造的  
な矛盾と、寡頭派と民主派の政治理念をめぐる対立、スパル  
タかアテナイかという外交の選択をめぐる葛藤が相互に連  
動しあっていることに着目させた点

問題点：それらの連関を強固なものとして過大に評価し固定的に

とらえてしまったことが歴史の実態から離れてしまった  
ブラディーン・クウィン：対立は実際には流動的であり、いつも  
革命的状況にあったのではない

論争の遺産：政策決定の一つの座標軸としての党派の重要性を強調

スパルタ帝国：アテナイ帝国のような論争は生じていない

E. g. Buckler, p. 70.

個々のポリス内部の党派政治とスパルタの帝国支配をめぐる対外  
政策との関連について指摘

分析の枠組みと基本的な視角

党派：中心となる分析項目

党派を通じてどのような議論がなされ世論を主導して政策が決定  
されていったのか

論点：紀元前六世紀から四世紀を通じてギリシア世界の内外に現われ  
た様々な帝国に対してポリスの分裂状況とポリス内部の党派間の  
権力闘争がどのように連動しあっているのか

そのような政治的緊張状態の中で帝国はどのようにして自己の  
存在理由を主張し、正当化しようとしたのか、帝国を支える物理  
的な基盤は何であったのか

前期の考察の対象：ギリシア人はペルシア帝国という異民族の大帝国  
にどのように向かい合ったのか、

長いヨーロッパの知的伝統となるヨーロッパとアジアを対立的  
にとらえ、アジアを専制独裁と政治的自由の欠如、アジア人の柔  
弱な体質、文化的な劣等性という言葉で評価してきた「オリエン  
タリズム」の起源となるギリシア人の「バルバロイ」観が何時・  
どのような状況で形成され、ギリシア人の中でどの程度共有され  
ていたのか、

ギリシア人の対外政策に如何なる影響を及ぼしていたのか

評価の基本的枠組み：ギリシア人全体の利害が個別ポリスの利害の延

長線上に位置付けられ、ポリスの利害が党派の利害に準拠しているという視点

古代ギリシア人の政治行動が党派に一つの大きな集約点を有しているのではないかという想定に準拠

分析と評価の効用：党派を政治行動や価値判断の座標軸とすると、ギリシア民族の自由、ポリスの自由といったこれまで普遍的・固定的な価値観とされてきたものが普遍性を失った浮動点の一つでしかないということを明らかに出来る

党派を独立変数とするとギリシア民族やポリスですら従属変数に転落してしまう

言葉を変えれば、ギリシア人の誰もが民族の自由、ポリスの自由を口にし、旗印として掲げるが、それらは特殊な政治状況の中で作り出された一種のプロパガンダであり、その時々状況の変化によって意味内容や訴求力の強弱を変えていくスローガンの類いに近いもの

## ギリシアの政治文化

ギリシア人は最後まで自分たちのルールで政治ゲームを演じ、ペルシアのような外部勢力も自分たちの政治ゲームの中に引き込み、駒の一つとして利用した

## 第一講 ギリシア人とリュディア人

はじめに

### リュディア王国

小アジアの内陸部、ヘルモス河の上流、トゥモロス山の北麓、パクトロス川のほとりにあるサルデイスの町を都

洗練された文化と豊かな富→ギリシア人を魅了

強大な軍事力→隣接するギリシア諸都市を畏怖

E. Will の評価：一種の妥協の上に成り立ち、相互に満足した状態

サッポー：サルデイスの宮廷文化に魅せられ、自分の膝元を立ち去っていった女弟子について歌を作る

アルキロコス：ギュゲスの富なんか惜しくはないと謳う

ソロン：クロイソスと幸せに就いて問答

アルクメオン：莫大な富を手に入れる

ペリアンドロス：アリュアッテスとミレトスの講和を仲介

スパルタ：クロイソスの寄付に感謝し、返礼に大型の青銅製の鼎を贈呈

↓

羨望と憧れの地

経済的・政治的な価値

リュディア王国に対するギリシア人の関心

クロイソスの悲劇：運命の大きな落差→傲慢に対する神の罰＝中庸

ナボニドスの年代記：キュロスの遠征→その地の王を殺し、凱旋

ヘロドトス：奇跡的な救済

バッキュリデス：神に救われ、ヒュペルボレオスの世界に移される

ミュソンの壺絵：焼身自殺を図る

問題提起：

なぜギリシア人は本来バルバロイと差別する異民族の国リュディアにかくも深い親近感と強い関心を抱き続けたのか。

ペルシア戦争期以降形成されて行く異民族に対する自己優越的な差別意識とは異なった感性がギリシア人の間に働いていたのではないか。



## リュディアとギリシア人の関係

メルムナス朝のリュディアとギリシア人との関係の奇妙な矛盾

小アジア沿岸に点在するギリシア人植民都市に対する侵略と征服  
島嶼部やギリシア本土の諸都市とは友好同盟関係→莫大な寄付  
リュディアの侵略行為に対する民族的敵意の欠如  
リュディアからの寄付や同盟の申し入れを歓迎  
多くのギリシア人がサルディスの宮廷を訪れ、リュディア王と親交を  
恥じることはなかった

歴代のメルムナス朝の王：ギリシア諸都市の領土を侵し、スミュルナ  
のように破壊するかエペソスのようにリュディア王の宗主権下  
に従属させ朝貢を課した

ギュゲス：ギリシア人に対する侵略戦争をはじめる  
ミレトスとスミュルナに攻め込み  
マグネシアを制圧  
コロポンを占領

サデュアッテス：十一年に及ぶミレトスとの戦争を始める

アリュアッテス：スミュルナを占領  
クラゾメナイに侵攻  
ミレトスと講和  
キンメリア人との戦いや南のカリアへの遠征と同時

クロイソス：最も露骨に戦争を仕掛ける

「様々な言いがかりをつけて攻撃した。重大な理由の見つかる時は、それを持ち出すのであるが、時にはとるに足らぬ口実を盾にすることもあった。」(Hdt. 1. 26.)

エペソスを手始めにイオニアとアイオリスの全ての都市を攻撃  
キリキアとリュキアを除くハリュス河以西の小アジアを征服

デルポイと親密な関係を醸成

ギュゲス、アリュアッテス、クロイソスの莫大な奉納  
本土や島嶼部の諸都市とは友好関係の確立

ペリアンドロス：アリュアッテスに三百名のケルキュラの男児を送る  
スパルタ：クロイソスの同盟条約締結の申し出を喜んで受け容れる  
クロイロスによる金の無償提供に感謝して大型の青銅の混酒器  
を返礼

ギリシアの神殿や都市に対する豪勢な奉納や寄付も単なる気前の良  
さではなく、これらをリュディアに繋ぎ止め好意的な世論を醸成しよ  
うとする政治的計算の上に成り立っていた。

歴代のリュディア王による贈り物政策は成功。

小アジアのギリシア諸都市に対する侵略戦争にも拘らず、歴代のリュ  
ディア王はギリシア人に対して好意的であったと評価され、彼らの各  
種の贈与は驚嘆の念を込めて語り継がれていった。

小アジアのギリシア人の態度にも矛盾

ギリシア人諸都市が一致団結してリュディアの脅威に対抗せず  
ミレトスに援助の手を差し伸べたのはキオスのみ←キオスがエリュ  
トライと戦をした折にミレトスがキオスを支援したその恩義に  
応える

数多くのギリシア人がリュディア王の宮廷を訪れ、リュディア王はこれら  
の訪問者を歓待

↑

ギリシア人を惹きつけた理由：

黄金に象徴されるサルディアの富。

ギリシア人の職人や芸術家に対する宮廷の需要。

傭兵としての雇用の機会。

華やかな宮廷文化。

亡命者：リュディア王の保護を受けて権力の座への復活を試みる。

商人：リュディアの織物や香料を求めてサルディアの市場を訪れる。

芸術家や建築家、画工、彫刻家：リュディア王や貴族たちの注文。

サッポアの女弟子：サルディアの宮廷の華やかさに魅せられて。

ギリシアの賢人の全て：サルディアを訪問

ソロン、アルクメオン

プリエネのピアス、ミュティレネのピッタコス

スキュティア王のアナカルシス

コリントスの僭主ペリアンドロス

ギリシア人への接近はメルムナス朝成立時からのリュディア外交の底流

ギュグス：ヘラクレス朝を支持するリュディア人の不満を抑えるために  
デルポイの神託を利用

ギリシア人の中での評判を重視→デルポイは対ギリシア政策の要石  
リュディア王のデルポイ重視と豪勢な奉納はデルポイの権威と影響力を高める

逆にリュディアはデルポイの権威と影響力を利用

クロイソスが神託の確かさ, , を確かめたという話も、デルポイの権威を

高めるための世論操作

ギュグス：王位篡奪に伴うリュディアの内紛を回避するためにデルポイの神託を利用

アリュアッテス：自らが罹った病についてデルポイの神託を伺う  
後世のギリシア人はアリュアッテスを一方では傲慢であったと評しながら、他方では「最も賢明(sophronestatos)」で「最も正しい(dikaiotatos)」と賞賛

クロイソス：ペルシアとの戦争の成否をデルポイに尋ねる

前六世紀の詩人アルカイオスは権力闘争に敗れサルディスに亡命し、クロイソスから二千スタテルもの資金を援助してもらう  
アイソポスをペリアンドロスの許に派遣

スパルタへの接近を企てる→トルナクスのアポロン像作成の為  
の黄金贈与

→同盟申し入れ

リュディア人とイオニアのギリシア人との長い親密な関係

ジョージス(P. Georges)：

イオニア諸都市の王家や貴族がカリア人やリュディア人と婚姻を通じて縁戚関係にあった

特にイオニア人がリュディア人に親密な感情を抱くのはカユストロスやヘルモス、マイアンドロスの沃野を占拠していたカリア人に対して共通の利害を有していたこと

共にカリア人を駆逐・制圧しつつイオニアのギリシア人貴族とリュディア人領主の領地はヘルモス河やマイアンドロス河下流域で混じり合い、婚姻を通じて互いの友情と家族の絆を育み、狩猟を共に催したり贈り物を交換し合ったり、逆に反目し合ったり襲撃し合ったりした

### ギリシア人の異民族観

ギリシア人を東方世界に惹きつけられたもの：金や銀、銅などの鉱物資源  
ブラウン (T. F. R. G. Braun) : 様々な物品の中で加工(未加工)の金属が  
アルミナを訪れた最初のギリシア人交易者にとって魅力

小キュロスの遠征軍には多くのギリシア人が傭兵として混じっていた。その中にはおそらく長くサルディスにおいてボイオティア訛りの方言を留めながらも、リュディアの風習にかぶれ両耳にピアスの穴を開ける、アポッロニデスのような人物いた。

異民族を「バルバロイ」と呼び、自らを「ヘレネス」と呼んで区別

バルバロイとは後世英語化された barbarian (野蛮人) という差別化された意味内容を本来は持たず、ただ単に理解不能な言葉を話す人々を擬音語的に表わした言葉でしかなかった

異民族を初めて「バルバロイ」と呼んだのはヘカタイオス

後になると自由の民であり文化的に優れたヘレネス (ギリシア人) とは対立する不自由、真正のデスポティズム、精神的に劣等な異民族を意味する

その様な理解とは別に異民族をも自分たちの神話体系の中に取り込んで行くことで当該民族の歴史的な位置付けやギリシア人との関係を象徴的に表現しようとする伝統の存在

ギリシア人は彼ら自身の来歴を神話伝承の中に位置付ける営為を重ねると共に、彼らが遭遇し、何らかの形で交渉を持つに至った諸民族を

自分たちの神話伝承の中に位置付けることによって理解  
彷徨える英雄の存在

ギリシア系の英雄：ヘラクレスやオデュッセウス

異民族系の英雄：ヘクトルやサルペドン、蛇女

ヘラクレス朝

ヘラクレスの子孫

メルムナス朝

アポロドロス（後1世紀）：オンパレとヘラクレスの子アゲラオスから始まる＝名前もギリシア風に注目

リュディア人とギリシア人との親族関係

エペソスの僭主ピンダロスの祖父がリュディア王のアリュアッテス

クロイソスの異母兄弟パンタレオンの母はイオニアの出身

リュディア王の妹はミレトスという名の人物の許に嫁ぐ

ホメロスに登場するリュディア人

マイオニア人の領主、ボロスの子のパイストス←イドメネウス

オトリュンテウスの子のイピティオン←アキレウス

ギリシア人の名前と呼ばれている・・・親しさ

ギリシア人の英雄の手にかかる・・・ギリシア人の民族的優越性

ローバック (C. Roebuck)：サルディスという一大中心地を伴った農民と牧  
人の村落からなる地方＝リュディア

アリスタゴラスの言葉：「リュディア人の住む土地は豊沃で、銀の産出額は  
他に類がありません」

ギュゲスに対するギリシア人の関心：

プラトン（『国家』）：ギュゲス（リュディア人の始祖と記されるだけで、  
ギュゲスという名前は出てこない）は王に仕える王の羊飼いであった。  
彼は地震によって開いた穴の中に入って行く。穴の中にはいろいろな  
不思議なものがあり、それに混じって銅の馬があった。その馬には小  
さな扉があり、その扉から中を覗いて見ると、大きな死体が収められ  
ていた。ギュゲスはその死体の指から黄金の指輪を抜き取り、自分の  
指に嵌める。指輪には姿を隠すという不思議な力があった。その力を

知ったギュゲスは姿を隠して王宮に入り込み、まんまと王妃と通じて王を殺害するのに成功し、リュディアの王位を手に入れたのである。  
ヘロドトス：ギュゲスはカンダウレス王に仕える側近であった。王に無理強いされて王妃の寝室に忍び込んだギュゲスは部屋に入って来る王妃の姿を目にする。そのことを知った王妃はギュゲスに王を殺して自分と結婚するか自殺するのかを迫るのである。王妃の恐ろしい要求を拒みきれなかったギュゲスは仕方なくカンダウレス王を殺害し、リュディアの王位を手に入れる。カンダウレスを支持する党派とギュゲスは内戦を戦うことになるが、デルポイの神の調停によって両者は和解  
ダマスコスのコロオス（紀元前後頃）：衛兵（doryphoros）であったギュゲスが王を殺害し王国と王妃を手に入れる



前王を殺し、その妃を手に入れる→オリエントの君主の非道徳性 (hybris)  
富の豊かさ←アルキロコスによって伝えられるギュゲスの富／クロイソスの財宝と気前の良さ

リュディア人にとってのギリシア人

対立と連携の歴史：

リュディア人貴族の所領：カユストロスの平原やヘルモス河、マイアンドロス河の下流域に展開

イオニア人貴族の所領と隣接



両者間の略奪や襲撃を伴う対立

リュディア王たちの帝国主義政策：ギリシア人との緊張状態を醸成  
婚姻を通じて密接な親族関係を形成



ギリシア人にとってリュディア人は単なるバルバロイではなかった  
リュディアとギリシア人との長いつながり：

青銅器時代の関係：

ミケーネ土器が出土

後期ヘラディックⅢC 期からプロト・ジオメトリック期に至るまで断絶することなく輸入

リュディアの彩色ジオメトリック土器（前九〇〇年頃に現われる）：

ギリシアのプロト・ジオメトリック期の影響

ヒッタイト文書のアッシュワに相当

トウドウハリヤシュの時代にアッタリッシヤシュ（アッヒヤの男）によってその国土から放逐されたマッドウツタシュなる人物がトウドウハリヤシュの前に現われ、小アジアの西部に領土を与えられている

トウドウハリヤシュの後継者代アルヌワンダシュの時代になるとマッドウツタシュはアッタリッシヤシュと手を組んでヒッタイトの領土を侵略

マッドワタシュ＝リュディア人特有の名前



ピードリー（J. G. Pedley）：リュディア人が前一二〇〇年頃のカタストローフのときにこの地に移住してきた民族ではない

アッシュアの地に住み続けたリュディア人が青銅器時代から小アジア西岸のギリシア人と接触を保ち、時には対立を孕みながらも時には同盟関係を結んで東のヒッタイト帝国の国境を犯し、宮殿体制の崩壊にも拘らず彼らとの交易はいわゆる暗黒時代を通じて維持され続けたということ、そしてリュディア人の陶工が輸入品から多大な影響を受けたという事実は注目に値する。

鉄器時代の関係：

リュディア人はギリシア人の造形芸術の才能は高く買っていたが、ギリシア人の生活様式や言語に影響を受けることはなかった。

キオスのグラウコス（アリュアッテスの注文に応じて鉄の溶接の技術を使って混酒器の台を作る）

サモスのテオドロス（クロイソスの注文に応じて巨大な黄金製の混酒器を製作）

サルディスにおける発掘：ギリシア人商人たちの他に建築家や彫刻家、  
陶工など多くのギリシア人がサルディスの町に住み、リュディア人の  
の注文に応じて建築や彫刻の製作などに活躍したことを明らかに  
する

ギリシアの造形芸術の流行やギリシア産土器の流入がリュディア人の  
生活や言語のギリシア化を意味するわけではない

言葉のギリシア語化は前三世紀の終わりまでは生じなかった

象牙細工や金細工：クレタ島やエペソスなどギリシア諸都市に輸出  
多くの金製の耳輪が出土→女性に限らず男性も耳輪を装着

リュディア人の庶民が使用する土器には幾何学様式の伝統が残る

詩のような文学はリュディア人の中では評価されず

リュディア人が評価したのは視覚に訴える造形芸術

リュディアやシリアなどで大量のギリシアの土器の出土

→購入し使用した人々のギリシア化を証明せず

オリエントはギリシアの芸術にあまり関心を持たず

前六世紀になると輸入品の品目はより広範囲となり、地元の土器に対  
するギリシアの土器の影響は顕著ではあるけれども、それでも量  
は僅かであって、品質的に高いものはなかった

エトルリア人とは違って、リュディア人貴族は容易に手に入る良質の  
ギリシア土器には関心を持たなかった

ローバック：コリントスの土器は前六世紀の初頭に現われる

アリュバロスが三個、オルペーが一個、その他の土器片が数個

アメリカチームの発掘調査：ペルシア時代まで

コリントスのものが百四十八点、

アッティカのものが三十一點、

ラコニアのものが十五点出土

最古のコリントス製の土器は後期ジオメトリック期の初期に属す  
るオイノコエと中期に属するコテュレの断片

リュディア人にとってギリシア人に対する関心が高かった理由

ひとつは傭兵



ラッサム A 碑文：アッシュールバニパルははっきりとギュゲスが  
「余の主権の頸木をかなぐり捨てたエジプトの王ピシャミル  
キの下に彼の兵を送った」と述べている

ディオドロス：プサンメティコスがイオニア人とカリア人を擁して  
エジプトの支配権を獲得

歴代のエジプト王は新バビロニアに対抗するためにギリシア人傭兵  
を使用

ペルシアのカンビュセスがエジプトに進攻した時、ペルシオンでの  
戦いでギリシア人とカリア人から成る傭兵部隊がペルシア軍と  
激しい戦いを交える

エジプトをリュディアに繋ぎ止めておく重要な手段の一つがギリシ  
ア人やカリア人傭兵の提供であった

リュディアの軍事力の重要な部分をギリシア人傭兵が占める

おわりに

メルムナス朝のリュディアとギリシア人の関係はメルムナス朝の王国を  
相続したアケメネス朝ペルシアに引き継がれる

小アジアに住むギリシア人と東方の帝国との関係は大きく変わることは  
なかった

サルデイスの総督府やスーサの宮廷には数多くのギリシア人が訪れ、あ  
る者は亡命者としてペルシア人権力者の支援を求め、ある者は医者として  
或いは工人として、さらには傭兵としてペルシア人権力者によって雇用さ  
れ、ある者は商人として、またある者は旅行者としてペルシア帝国下の各  
地を訪れる

イオニアの反乱、失敗に終わったギリシアへの遠征、アテナイを盟主  
とするデロス同盟との対峙、キュロスの反乱に始まるスパルタとの確執に  
もかかわらずペルシアとギリシア諸都市との関係が途絶えることはなかつ  
た。リュディア王と同じようにペルシア王は使節を直接ギリシア諸都市に  
派遣するか或いは亡命者を通じて間接的に働きかけるか、さらには豊富な  
資金を提供することによって政治的影響力を行使するか、とにかく多岐に

わたる手段を介して両者の関係は維持された

ヘレネスとバルバロイという二項対立的なイデオロギーの創作と宣伝にもかかわらず、ペルシアとギリシア人との関係が全てこの理念によって律せられていたわけではなかった。アテナイで活躍した政治家や文筆家はヘレネスとバルバロイとの和解しがたい対立の感情をあおったが、全てのギリシア人がその様な対立感情を共有していたわけでもなかった。ギリシア人は現実主義者であった。自分たちの利益となるのならばペルシアと結び付き、ペルシアの力を利用する事も厭わなかったのである。

このような状況は既にメルムナス朝のリュディアとギリシア人の間に見られる。ここに一つの伝統がギリシア人とオリエントの諸勢力との間に醸成されていたことを私たちは知るのである。メルムナス朝のリュディアとギリシア人の上に作り出されていった関係こそはその後の東方とギリシアの関係の原型であった。

## 第二章 イオニア反乱

はじめに

イオニア反乱とは

前 499～494 年 ミレトスを中心

ヘロドトスが主な史料

アリスタゴラスのナクソス遠征失敗

ペルシア人指揮官メガバテスとのいさかい

### a 反乱の勃発と拡大

ヒスティアイオスからの指示：イオニア人をレバントに集団移住

アリスタゴラスとその支持者たちの緊急会談：反乱を決定

ミュウスに集結中の遠征艦隊での集会→僭主の逮捕・各都市に

引き渡す＝公然たる反乱行為

アリスタゴラスをギリシア本土に派遣→スパルタ・アテナイを訪問

間

アテナイとエレクトリアからの援軍到着→サルディス攻撃・炎上

ペルシア軍の反撃・エフェソス付近での敗北→アテナイ手を引く

カリヤ・キプロスへの反乱の拡大・援軍の派遣

### b ペルシア軍の反撃

フェニキア艦隊の反攻→サラミスの戦い→キプロスの平定

ヒスティアイオスの下向：調略

プロポンティスへの拡大・トラキアへの拡大

アイオリスの平定

カリヤの平定→イオニアの孤立化

ミレトスの政変→アリスタゴラスの逃走と死

ヒスティアイオスの活動と死→アルタフェルネスの嫌疑

ラデの海戦

サモス戦隊の脱落・レスボス戦隊の脱落

### c 反乱の終焉

ミレトスの陥落

ミレトスの破壊と指導者の強制移住

戦後処理：民主制の導入

ヘロドトスの評価：批判的・無責任な行動

アリスタゴラス、あるいはヒスティアイオスと言う僭主個人の野心（アリスタゴラスは自己保身、ヒスティアイオスはミレトスへの復帰）が原因

途中で放り出して逃走

同じ小アジア沿岸に住むアイオリス人やドーリス人の支持は得られずギリシア本土のアテナイをこの反乱に巻き込んだためにペルシア

戦争を引き起こした

ラデの海鮮に見られるように各ポリスの分立主義から自滅

現代の研究者の評価：肯定的

やむを得ない事情の存在→ペルシアによる抑圧

民主制への強い願望

レンシャウ：経済的窮乏

オズウィン・マリー：貿易不振から来る経済の後退

ジョージス：王の好意をめぐる帝国貴族間の激烈な競争

メガバテスの強圧的な越権行為が直接の原因

僭主制の廃止は望む

双方とも全面的な対決を望まず、妥協点を模索

アテナイからの援軍が反乱を不可避に

キーナスト：ジョージスを批判

ペルシア支配がイオニア人の中にギリシア人の共属意識を形成

ペルシアの支配からの解放を望む

僭主制の廃止だけが目的だったのではない

ウッド：僭主たちの反乱

民衆を引きつけるための見せ掛けの民主制

ヴァルター：貴族たちの反乱

地位と名誉をめぐる貴族間の競争

背後に潜む問題点

近代歴史学の言説、民族主義・民主主義・政治的自由・アジア対  
ヨーロッパ、の枠内での議論

歴史的意義

バルバロイ概念がはじめて形成され、政治プロパガンダとして使用  
ペルシア戦争と同じ行動パターン  
ペルシア戦争の前哨戦となる牛

ナクソス遠征

露呈された構造的矛盾

- 1) ペルシア軍は勝ちつづけなければならない→無敵のイメージ
- 2) 帝国官僚間の忠誠競争と反目：アリスタゴラスとメガバテス、  
ヒスティアイオスとアルタフェルネス

軍事的蹉跌が属州民の反乱を招く

スキュティア遠征後のビュザンティオンやカルケドン、アンタンド  
ロスやランボニオンなど

帝国辺境部の統治の特徴

諸都市の僭主との個人的な紐帯

ペルシアの軍事的存在と威信が重要

辺境部における帝国統治の問題点

恒常的な軍事的存在の欠如

失敗→ペルシアの軍事的威信の動揺

ナクソス遠征の失敗→ペルシアの軍事力に対する過小評価

「ペルシア現象」と言う構造的問題

潜称者の出現を予防→高級官僚相互の掣肘と忠誠競争

→敗者の絶望的反抗を招く

## ナクソス遠征の経過

### ナクソスでの党争

ケイロマカ（太っちょ）と呼ばれる寡頭派の敗北→亡命  
ミレトスのアリスタゴラスに支援を求める

### 遠征準備

アリスタゴラスの威信の誇示＝総督との個人的関係を強調

アルタプレネスの支援を求める：百隻規模の艦隊動員

四十人（搭乗戦闘員）×百隻＝四千名

＝ナクソスの重装歩兵の半数

アルタプレネス、派遣艦隊の増強：二百隻

上陸部隊の規模八千名＝ナクソスと同数

総督のイニシアティブを示そうとする

兵力量のバランスを図る＝ペルシア軍の基本的構想

↓

遠征軍の規模を増強することで補給に深刻な重圧を掛ける

ダレイオスの承認を得、メガバテスを総指揮官とする→

ペルシア人部隊の存在→アリスタゴラスの指揮権の及ばない

戦闘部隊の存在→ギリシア人将兵とのあつれきの発生

指揮系統の二重性の発生→メガバテスはアリスタゴラスの

指揮下

遠征軍集結の時間と情報の漏洩

欺瞞工作（ヘレスポントスに向かわせる）→作戦を複雑化する

↓

作戦構想、指揮系統、部隊編成、補給問題、情報管理のすべて

を複雑化→集結している艦隊や陸上部隊を一般旅行者の目から

隠蔽することは不可能

成功の要点はナクソス側が防衛体制を整える前に遠征軍を上陸

させ、内部協力者を確保すること

### ナクソス遠征第1段階

情報がすでにナクソスの漏れていた可能性

特に集結している遠征軍の規模（旅行者による情報提供）

→疎開と食料備蓄、城壁の増強

ヘレスポントスに向け航行

カウカサにてミュティレネ戦隊の合流

スキュラクス事件：歩哨警備を怠る

メガバテスによる逮捕

アリスタゴラスの介入→指揮官は自分、  
スキュラクスは知人

両指揮官の論争始まる

ナクソス遠征第2段階

ナクソス側の徹底防衛

包囲の長期化→補給に重圧を掛ける→資金の枯渇

計画の失敗

両指揮官の対立深刻化

ナクソス遠征第3段階

ナクソスからの撤退

ナクソス人亡命者を農村部の要衝に残置

ミュウスに帰還

遠征後の事態

メガバテスとペルシア人将兵の下船

アリスタゴラス、アルタペルネスに多額の借金を負っていた

↓

アリスタゴラス、窮地に立たされる→僭主の地位を失うのではないかと恐れる→遠征失敗の責任

↓

メガバテスの内通と言う噂の流布→責任転嫁

↓

ミレトスに向かい、支持者と事後の相談を行う＝アリストゴラスの僭主支配を支える党派の存在

#### イオニア反乱への序曲

ヒスティアイオスの教唆は噂：おそらくアルタペルネスから流された→ヒスティアイオスの下向後の指揮権をめぐる両者間の確執

反乱への決断はアリストゴラスとその支持者の間で話し合われ、決定された（ヘカタイオスのみ反対）

艦隊に搭乗中の反僭主派の貴族層をターゲットとする遠征に同行した僭主は親ペルシア派で彼らの協力は期待できなかった

イアタゴラスのミュウス派遣

#### イオニア反乱の原因についての検討

##### 原因論1：僭主個人の野心：ヘロドトス

アリストゴラスとヒスティアイオスのそれぞれの事情

アリストゴラス：前僭主ヒスティアイオスの従兄弟

サルデイスの総督アルタフェルネスとの個人的信頼関係

ミレトスの貴族社会の中の支持・党派的基盤

（イアタゴラスやヘカタイオス、ピュタゴラス）

ミュルキノス（トラキア）を個人的に領有

イオニア社会における個人的ネットワーク（ミュンドスのス

キュラクスやナクソス遠征に参加したイオニアの諸僭主）

ナクソス遠征の失敗

アルタフェルネスの信頼を損ねる（アルタフェルネスの修正案を失敗に導く）

メガバテスとの指揮権争い（ペルシアの王族との争い）

アルタフェルネスからの借り入れの返済



→僭主の地位喪失と破産の危機

ヒスティアイオス：前僭主・ダレイオスの側近

ダレイオスの恩人として、全幅の信頼を得ていた

ダレイオスの側近（権力との近さが大事：国務長官より大統領  
特別補佐官）

サルデイスのペルシア人の間にも支持者や仲間

←アルタフェルネスが処刑（6巻4）

ミレトスへの帰国を願う→アリスタゴラスを唆す

これはアルタフェルネスとの争いの中で意図的に捏造

入れ墨事件・アルタフェルネスの警告（6巻1）：「ヒ  
スティアイオスよ、ことの真相はこうじゃよ。この靴はそ  
なたが縫い上げて、それをアリスタゴラスが履いたまでの  
ことじゃ。」

イオニアへの派遣はダレイオスの決定

ヒスティアイオスを通じてイオニアの指導者たちとの個人的な  
パイプを活用して反乱の沈静化を図る

サルデイス総督アルタフェルネスとの指導権争い

→単独で行動（キオス→ミレトス→レスボス

→ヘッレスポントス・アイオリス→キオス→タソス）

処刑後もダレイオスの信頼を損なうことはなかった（6巻30）

イオニア反乱に大衆的基盤の広がりを見ようとする研究者には支持さ  
れず

原因論2：イオニアの大衆は民主制を希求

ミュウスの艦隊での会議で僭主制の廃止と僭主の逮捕が行なわれた

前僭主に対する処罰：ミュティレネでは前僭主のコエスが石打

その他の都市では追放

ペルシアの傀儡というイメージ

ヒスティアイオスの演説：ダレイオスのおかげ

多くの僭主がペルシアに亡命

ラデの海戦時にペルシアの手先となって活躍

イオニア反乱の後マルドニオスの手で廃止

ジョージスの見方：(1) 旧政権に連なる人々（オロイテス）を更迭

(2) 経験のない高圧的な人物（アルタフェルネスやメガビュ  
ゾス）に置き換え

(3) 僭主を組織的に設置→その為の大衆的基盤を欠く

(4) 僭主は貢税の徴収と軍役の履行

(5) 僭主の尊大な態度

↓

人々の反感と恨みを買う

言説（discour）としてのアテナイをモデルとする政治進化論

王制→貴族制→僭主制→民主制

個人的野心よりはそれが受け入れられていく大衆的基盤・社会を重視  
する姿勢や視点

アテナイ型モデル適用の問題：普遍的有効性を持たない。かなり特殊  
なモデル

しかし、イオニア社会はそれほど大きく変化しなかった

ヘカタイオスが重用されている

デロス同盟期、イオニアの多くは寡頭制でアテナイ型の民主制で  
はない

ハリスの見方：僭主はイオニアの富裕者や寡頭派の利益代表者

ダレイオスはそのような代表者に僭主の地位委託

前 520 年代に寡頭派体制確立

ヴァルターの見方：貴族間の血縁集団とオイコスを基盤とする権力闘争

敗者は資産没収・報復の為の亡命

ポリス内の内訌

原因論 3：反ペルシアの民族感情の高まり

スパルタやアテナイにおけるアリスタゴラスの演説

バルバロイ観の披瀝

ペルシアによる鎮圧を「奴隷化」と呼ぶ

近代的な補強

経済的苦境（ペルシアの経済政策と貢税徴収）

近代ナショナリズムの応用

傀儡僭主の強制によって政治的自由を失う、という視点

キーナストの見方：（１）支配が過酷ということではなかった

（２）東方風の厳格な刑法と官僚制への反感

（３）貢税の徴収

（４）イオニア人をバンダカ（奴隷）として処遇することへの反感

バルサーの見方：（１）経済的には抑圧せず

（２）イオニアは経済的に繁栄

（３）イオニアを破壊せず

（４）貨幣経済の実質的発展

（５）アテナイの帝国政策がイオニアを困窮化

ジョージスの見方：（１）穀物交易の中心がエジプトから黒海に移行

（２）エジプトでの交易の中心がメンフィスに

（３）トラキアでの銀産出の増加→銀地金の供給量が増える

（４）傭兵需要の高さ→貢税が退蔵されることなく、還流

近代的民族感情の欠如

イオニア反乱にギリシア人の一体化は醸成されず

ハリカルナッソスなどのドーリス諸都市の欠如

アイオリス諸都市は強制されて参加、ペルシアの鎮圧に強く抵抗せず

検証１：経済的困窮について

ペルシア時代における貨幣の発行状況

トータルな貨幣の発行状況は不明

貨幣の発行地と貨幣の種類の広がり分かる

Kraay の研究を基礎

1. 貨幣の発行は継続：ペルシア戦争期までに 140 種類  
銀地金の供給は途絶えず。

供給量の拡大

貨幣経済の発展

2. 貨幣の発行地の拡大：

トラキアーイオニアーエウボイアーアッティカ

ーコリントス（キュロス時代）

ナクソスやデロス、サモス（島嶼部）、更にはカリアへ

（カンビュセス時代）

ボイオティア（ダレイオス時代）

銀地金の流通範囲の拡大

3. 発行される貨幣の種類が増加：キューロス時代（13）

カンビュセス時代（26）

ダレイオス時代（100）

4. ペルシア自身貨幣を発行（ダレイコスとシグロス）

エーゲ海を中心とする地域において出土している貨幣の種類はペルシアの小アジア征服の時期からペルシアがエーゲ海域から撃退されるまでの約 60 年の間で約一四〇種類に上る。

キューロス二世（～529 年）時代に属するものは 13 種類。カンビュセス（529～522 年）時代に属するものは 26 種類。そしてダレイオス一世（522～486 年）時代に属するものは 100 種類に達する。

キューロス二世時代の貨幣の発行地は僅か八か所でしかないが、その広がりにはトラキアやイオニアの沿岸から、エウボイア、アッティカ、更にはコリントスと西へと広がっている。そのうち四か所ではスタテル金貨、残りの四か所では一ドラクマから四ドラクマまでの銀貨を発行している。このことはペルシアの進出がこの地域において順調に発展してきた貨幣経済を抑制するものでなく、また莫大な金額の貴金属貨幣がエーゲ海の沿岸部からアジアの内陸部に搬入されたとしても、この地域における貴金属の流通を阻害するようなものではなかったことを物語っている。

カンビュセス時代についてはその治世の短さを勘案すると、貨幣の発行は比較的活発であったと判断してさえ差し支えないように思われる。貨幣の発行地はトラキアで特に著しく、一挙に一〇倍増加している。また発行地の広がりも著しく、ナクソスやデロス、サモス、更にはカリアへと大きくエーゲ海を南に拡大しているのである。

この趨勢は続くダレイオス一世時代にも継続しているように思われる。イオニア反乱までの約二〇年間にこの地域で発行された二六種類の貨幣が紹介されている。トラキアやカリア、島嶼部やアッティカ、コリントスなどと並んでボイオティア諸都市が貨幣の発行地として顔を出している。ダレイオス一世の「収奪的な貢税政策」にも関わらず、ギリシア諸都市による貨幣発行への意欲は一向に殺がれていないことが理解できる。

更に注目されるのは新たに帝国領に編入されたトラキア（アクテやケルソネソス、更にはマケドニアを含む）における発行される貨幣の種類の急増である。それまでの四種類から一気に二六種類に、発行地も四か所から一八か所と大きな広がりを見せている。イオニアやカリアにおける貨幣発行の状況変化はこの時期に起きたイオニア反乱を反映している。ペルシア

自身が発行したシグロス銀貨も出土しており、当事者たちの政策努力を反映するものである。

エジプトとの交易は途絶えず

サモスのマイアンドリオスがまだ私人であったダレイオスに緋色の  
コートを送る

メンフィスから多くのギリシア土器出土

ヘカタイオスのエジプト訪問の話

ヘロドトス自身のエジプト訪問

ペルシアによるイオニア支配の実像

基本的にはペルシアはその宗主権下に入ったイオニアのギリシア人社会に強く干渉することはなく、既存の体制を温存し、それを帝国支配のために利用したのである。イオニア人に対するキューロスの返答は衝撃を与えたけれども、リュディア時代の宗主国とイオニア諸都市との関係が激変したとは伝えられていない。キューロス時代にマザレス、次いでハルパゴスによる武力行使とプリエネのような破壊の事例が伝えられている。しかしそのことがイオニア諸都市の政治的状況が劣悪な状況に落ちていったとは伝えられていない。

多くの研究者はイオニアのギリシア人に対するペルシアの政策はダレイオス時代に劇的に変化したと見ている。それは「商売人」と評されるダレイオスの帝国再編成の一環と見られている。つまり、オリエント流の官僚支配の貫徹、それに連動する僭主支配の導入、ギリシア人の伝統的な政治システムの否定。このダレイオスの帝国政策がイオニアのギリシア人に重苦しく押し掛かっていたのだと、評価するのである。

それと同時にペルシアによる経済的な収奪と交易におけるフェニキア人優遇がイオニアの経済的活力を抑圧し、イオニア人の間に不満を強めていった、と見るのである。

政治的にイオニアのギリシア人たちがペルシアの支配下に入ることによって抑圧されるようになり、彼等は従来享受してきた政治的自由を喪失

したのか否かについては別の論文で論じたのでここでは触れない。経済的な側面についてはバルサーやジョージスが論じている点以外の問題についてこれから触れていきたい。

#### 検証1：ペルシア時代における貨幣の発行

クレイ（Kraay）に基づいて、ペルシアの小アジア征服時（前五四五年ころ）からペルシア戦争時（前四八五年ころ）までのエーゲ海を中心とする地域から出土している貨幣を検討してみよう。

クレイは一千例以上のギリシア及びその周辺地域の貨幣を写真つきで紹介している。この紹介されている貨幣の数そのものは大変な数だと思われるが、それでも数量的に処理するには大きな問題がある。

クレイは発掘報告されている貨幣の総量を取り上げているわけではなく、貨幣の種類を総体を扱っているわけでもない。彼のリストを表分類した時にポリスごと、地域ごとの貨幣の種類と事例が余りにも少なく、不自然と思われるからである。つまり、ここで扱う貨幣はクレイが任意でピックアップしたものに過ぎない。そしてそれを本報告者がリストアップしただけである。更に、貨幣の出土そのものの偶然性や地域的な偏りを考慮しなければならない。貨幣が出土している地域の偏りや偶然性という要素を勘案しなければならない。

これを集計して統計的処理を施しても、統計学的には意味はない、ということをお断りしておかねばならない。従って、ここでの議論は定量的な視点からではなく、定性的視点から進めていく。

個々のポリスがどの時期にどれくらいの量の貨幣を発行したのかを論じるのではない。どのポリスがどの時期に発行した貨幣の中でどれ位の事例が取り上げられているのか、を論じるつもりである。

そして、ペルシア時代初期にエーゲ海を中心とする諸地域で発行された貨幣の種類が多いのか少ないのかを一つの評価基準として、貢税を通じてのペルシアの財政政策がこの地域において抑圧的であって、結果としてこの地域で産出し流通している金や銀などの貴金属地金の流通量を危険な水準にまで減少せしめ、この地域の貨幣経済に大打撃を与えたのかどうなの

か、を評価してみることにしたい。

エーゲ海を中心とする地域において出土している貨幣の種類はペルシアの小アジア征服の時期からペルシアがエーゲ海域から撃退されるまでの約 60 年の間で約一四〇種類に上る。

キューロス二世（～529 年）時代に属するものは 13 種類。カンビュセス（529～522 年）時代に属するものは 26 種類。そしてダレイオス一世（522～486 年）時代に属するものは 100 種類に達する。

キューロス二世時代の貨幣の発行地は僅か八か所でしかないが、その広がりにはトラキアやイオニアの沿岸から、エウボイア、アッティカ、更にはコリントスと西へと広がっている。そのうち四か所ではスタテル金貨、残りの四か所では一ドラクマから四ドラクマまでの銀貨を発行している。このことはペルシアの進出がこの地域において順調に発展してきた貨幣経済を抑制するものでなく、また莫大な金額の貴金属貨幣がエーゲ海の沿岸部からアジアの内陸部に搬入されたとしても、この地域における貴金属の流通を阻害するようなものではなかったことを物語っている。

カンビュセス時代についてはその治世の短さを勘案すると、貨幣の発行は比較的活発であったと判断してさえ差し支えないように思われる。貨幣の発行地はトラキアで特に著しく、一挙に一〇倍増加している。また発行地の広がりも著しく、ナクソスやデロス、サモス、更にはカリアへと大きくエーゲ海を南に拡大しているのである。

この趨勢は続くダレイオス一世時代にも継続しているように思われる。イオニア反乱までの約二〇年間にこの地域で発行された二六種類の貨幣が紹介されている。トラキアやカリア、島嶼部やアッティカ、コリントスなどと並んでボイオティア諸都市が貨幣の発行地として顔を出している。ダレイオス一世の「収奪的な貢税政策」にも関わらず、ギリシア諸都市による貨幣発行への意欲は一向に殺がれていないことが理解できる。

更に注目されるのは新たに帝国領に編入されたトラキア（アクテやケルソネソス、更にはマケドニアを含む）における発行される貨幣の種類急増である。それまでの四種類から一気に二六種類に、発行地も四か所から一八か所と大きな広がりを見せている。イオニアやカリアにおける貨幣発



行の状況変化はこの時期に起きたイオニア反乱を反映している。ペルシア自身が発行したシグロス銀貨も出土しており、当事者たちの政策努力を反映するものである。

注目すべきはエーゲ海域にペルシアが進出し、小アジアを属州化し、エーゲ海域に金や銀などの貨幣地金を提供してきたトラキアを支配下に組み込んでも当該地域での貨幣の発行そのものは強い制約を受けることなく、発行し続けていたことである。特にダレイオス一世の現代の研究者の間で悪名高い徴税制度の組織化もエーゲ海域を中心とする諸地域での貨幣の発行を抑制することがなかった点は重要である。

イオニア反乱の原因がペルシアによる経済的な収奪とギリシア人諸都市の経済的困窮とする説を念頭において、イオニア反乱直前の時期に当該地域で発行される貨幣の種類が急増しているのを見ると、ペルシアが当該地域から恒常的に膨大な量の金や銀を貢税という形で収奪し、王宮に退蔵したために流通する貨幣の地金が極端に不足し、引いては発行される貨幣の量そのものを低下させて、貨幣不足を招いたとする説が妥当しないことが分かる。

## 検証2：沿岸部、更にはギリシア本土との経済交流

ギリシア人に好意的であったリュディアのメルムナス朝の崩壊と、ギリシア人に非好意的なペルシア人の小アジア進出はサモスやミレトスなどの諸都市を媒介として行われてきたアテナイなどのギリシア本土の諸都市との交易パターンを根底からひっくり返すような事態が将来したのであろうか。

確かにヘロドトスはスパルタの使節に対する応接の中で、ギリシア人の文化に対するキューロスの嫌悪観をはっきりと指摘している。クセノフォンも証言している「正直さ」についてのペルシア人の厳格な道德観念は、アゴラで日常繰り返される商業行為の「不誠実さ」への嫌悪感、或いは理解のし難さはペルシア人の中で共有されていたのかも知れない。

しかし、そのような感情がペルシア人の心の底流に澱んでいたとしても、政治と経済の世界は別のものである。ペルシア人が「不誠実な」ギリシア

人を懲罰して、ペルシア風の社会経済体制を強制しようとした形跡もなければ、ギリシア製品に対して門戸を閉ざすというような強圧的な政策を展開した痕跡も見当たらない。

イオニアを初めとする小アジア沿岸のギリシア人は確かにペルシアの軍事力によって征服された。しかし、征服したペルシアはこれらギリシア人に対してアゴラでの商取引を禁止してはいない。ハルパゴスのカリア遠征軍にはイオニア人らのギリシア人が軍役に就いているし、カンビュセスのエジプト遠征軍やダレイオスの遠征軍にはギリシア人傭兵が雇用されて重要な一翼を担っていた。ヒスティアイオスの例に見られるように、ペルシア王は自分に仕え、大きな功績を挙げた者にはそれに見合う褒賞を与えているのである。

サルディスでの発掘はリュディア時代からペルシア時代にかけて輸入され使用されたギリシア土器を発見している。前六世紀前半におけるコリント土器の急激な減少とアッティカの黒絵式土器の急増はリュディア人の好みの変化の結果である。これはペルシア時代に入っても変わることなく、サルディスの住民はアッティカからもたらされる土器を購入し使用し続けたのである。前六世紀末ころからギリシアでは黒絵式の土器から赤絵式の土器へと流行が変わっていくが、サルディスでは赤絵は余り好まれず、黒絵が相変わらず人気を博していた。

イオニアの反乱、マラトンの戦いやサラミスの海戦、ミュカレーの戦いなどのペルシア戦争、エウリュメドンの戦いやアテナイ軍のエジプト遠征など、政治の世界ではアテナイを中心とするギリシア世界とペルシア帝国との対立は厳しいものがあつたが、その事と経済は別も問題であつた。ダスキュレイオンの総督府からは三〇〇点ものアッティカの赤絵式土器が出土しているし、サルディスの町からは少なくとも六〇点もの黒絵式土器の断片が出土している (67)。

つまり、ギリシア本土から輸入される商品に対する消費者としての好み問題はあつても、ギリシア人に対する生理的嫌悪感や政治的思惑からギリシア商品の輸入を抑制するというような政策はペルシア人には無縁であつた。

## 結論

新しい支配者であるペルシアがその支配下に組み込まれたギリシア人や、その背後に広がる地域に居住するギリシア人に対して抑圧的・敵対的な政策を実施したのか否かについてはハッキリしている。今のところそのような事実を見出すことはできない。むしろ逆に経済という点に限って見れば、リュディア時代からペルシア時代に変化しても経済の状況はそれほど大きくは変化してはいない。むしろ、リュディア時代の趨勢がペルシア時代に入って更に助長された側面すら見られるのである。貨幣発行の地域的な広がりがある。

つまり、ペルシアの支配を抑圧的と見、ギリシア人に対して敵対的であったと評価する学説は完全な誤りであるということである。それは一種のヨーロッパ近代の「オリエンタリズム」と偏狭な「民族主義」史観の産物であった。そしてそのような歴史観は二一世紀を生きる私たちにとって無縁なものであると断言しても良いだろう。

レジメ

(1) Hdt. 3. 90.1 :

「イオニア人、アジアのマグネシア人、アイオリス人、カリア人、リュキア人、ミリュアイ人それにパンピュリア人から（というのは彼等は彼が貢税を一括して割り当てていたからである）銀四〇〇タラントンが入って来た。これを彼は第一ノモスとしたのである、」

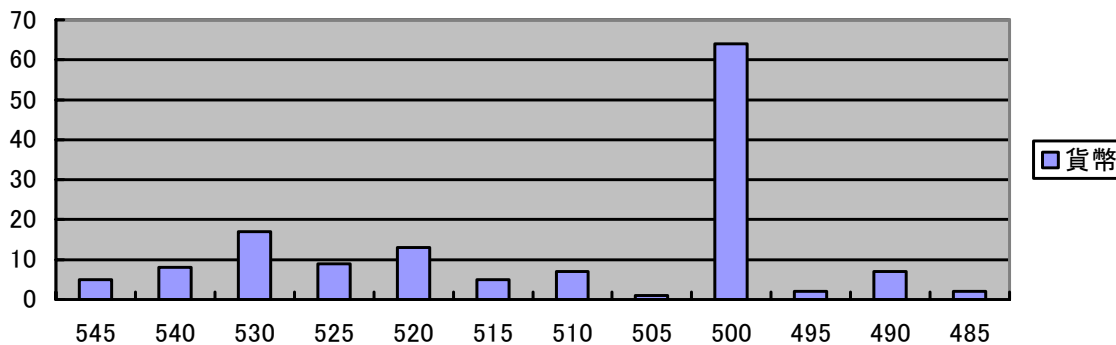
(2) Hdt. 3. 95. 1-2 :

「(1) バビロニア・タラントンで集められた銀はエウボイア・タラントンでは九八八〇タラントンとなる。金を一三倍して計算すれば、砂金が四六八〇エウボイア・タラントンであることが分かる。(2) 以上すべてを合算すると毎年ダレイオスの許に一万四五六〇エウボイア・タラントンもの額が集まったのである。さらに私は残りのこれらよりも小さな額については言及していない。」

(3) Hdt. 3. 96. 1-2 :

「(1)以上の貢税がアジアならびにリビアのほんの一部からダレイオスの許に入って来たのである。勿論、時が経つうちに島嶼の住民やテッサリアまでのヨーロッパの住民からさらに貢税が入って来たのである。(2) 以上の貢税を王は次のような方法で保管した。陶製の壺の中に溶かしたものを流し込み、容器が一杯になると土器を取り除いた。財貨が必要な時には、そのつど必要なだけを型で打ち出したのである。」

(4)

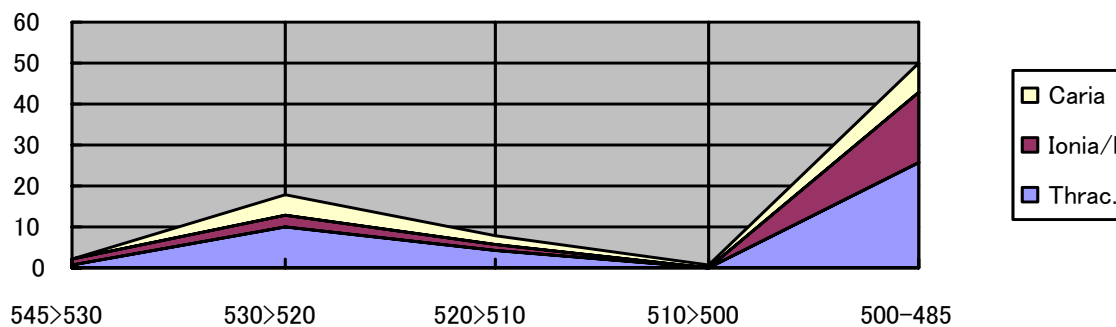


(5)

	545>530	530>520	520>510	510>500	500>485	Total
Athens	5	4	4	2	3	18
Corinth	2		2	1	1	6
Islands	4	4	3	(1)	5	16+(1)
Boeot../Tessal./Mag.				3+(1)	4	7+(1)
Thracia/Acte/Mac.	1	10	4		26	41
Ionia/Hell.P.	1	3	2		17	23
Caria		5	2	1	7	15
Lycia					1	1
Persia					2	2
Ionian Islands			1		3	4
Others					5	5
Total	13	26	18	8	74	139

Cranion belongs 'Others' group.

(6)



参考文献

J. Balcer, *Sparda by the Bitter Sea: Imperial Interaction in Western Anatoria*, (Chico, 1984)

Idem, *The Persian Conquest of the Greeks 545-450 B.C.*, (Konstanz, 1995).

P. Briant, *Histoire de l'Empire perse de Cyrus à Alexandre*, (Paris, 1997)

P. B. Georges, "Persian Ionia under Darius: The Revolt reconsidered," *Hist.* 49 (2000), 1-39.

V. B. Gorman, *Miletos, The ornament of Ionia: A History of the city to 400 B.C.E.* (Ann Arbor, 2001).

A. M. Greaves, *Miletos: A History*, (London and New York, 2002).

G. Harris, *Ionia under Persia: 547-477B.C.* (diss., Evanston, Illinois, 1971)

C. M. Kraay, *Archaic and classical Greek Coins*, (New York, 1976)

D. Kienast, "Bemerkungen zum jonischen Aufstand und zur Rolle des Artaphernes", *Hist.* 51 (2002), 1-31.

O. Murray, "The Ionian Revolt," *CAH2* IV(1988) 461-490.

C. Roebuck, "The Economic Development of Ionia", *CP*48 (1953), 9-16.

G. Walser, "Persischer Imperialismus und Griechische Freiheit," *Achaemenid History* II, (Leiden, 1987) 161.

U. Walter, "Herodotus und die Ursachen des Ionischen Aufstand", *Hist.* 42 (1993), 257-278.

### 第三章 ペルシア戦争はいつ終わったのか

#### 1. 高校世界史の教科書の扱い

多くは前449年としている

17冊中、13冊が前449年。山川、『詳説 世界史』を含む。

4冊だけが年代を記さず。

清水書院、『詳解 世界史B』。

同、『要解 世界史B』。

帝国書院、『新編 高等世界史B 最新版』。

三省堂、『世界史B 改訂版』。

しかし、平成5年版の清水書院、『詳解 世界史B』はペルシア戦争の終わりを前479年としていた。

「戦後のアテネは、ペルシアの復讐にそなえてデロス同盟を編成し、その盟主として加盟国に対する支配を強化した。」（『要解』、14頁）とあり、戦後はデロス同盟の編成ではなく同盟国に対する支配の強化に置かれているような曖昧な表現になっている。

#### 2. ペルシア戦争はペロポネソス戦争よりも長く続いたことになる。

ペルシア戦争＝前500～449年＝51年間

ペロポネソス戦争＝前431～404年＝27年間

#### 3. 文献史料との矛盾

##### A ヘロドトスとの矛盾

ヘロドトスはペルシア戦争の記述を前479年の事件(プラタイアとミュカレ、そしてセストス)で記述を終えている。

##### B トウキュディデスとの矛盾

トウキュディデスは、ペルシア戦争はペロポネソス戦争よりも短く、たった二つの陸戦と海戦で終わったとしている。

テルモピュライとプラタイアイ

サラミスとミュカレ

トゥキュディデスはペルシア戦争にエウリュメドン、エジプト、キプロスを含めていないことになる。これらはいわゆる五十年期に含まれる。

#### C アリストテレスとの矛盾

『アテナイ人の国制』のなかでデロス同盟の結成をペルシア戦争の後としている。

#### 4. 碑文資料との矛盾

いわゆる『蛇碑文』。アオリスト形で「戦争を戦った」としている。

『メガラ碑文』。古代末期のものだが、ペルシア戦争にはアルテミシオン、ミュカレ、サラミス、プラタイアが含まれているが、それ以降のものは含まれていない。

#### 5. ペルシアとの戦争状態の継続

前478年：パウサニアスによるキプロス・ビュザンティオン遠征

前477年：ペルシアとの戦争状態継続を前提とするデロス同盟の結成

以降：デロス同盟による一連の軍事行動

特にキモンによる行動：前460年代のはじめ：エウリュメドンの戦い

前450年のキプロス遠征

エジプトの反乱に出兵：

ペルシア戦争は終わっていないという認識

M. C. Millar, p. 9：470年代と460年代初期はヨーロッパにおけるペルシアのポケットに対する遠征で埋められている。

#### 6. カッリアスの平和

ディオドロス。前449年に記述。ペルシアの勢力範囲の設定。

プルタルコス。ペルシアの勢力範囲を限定。

前4世紀の諸資料（イソクラテス、デモステネスなど）。



ペルシアの勢力範囲を限定しギリシア都市の自治保証  
アンタルキダスの平和に対して

#### 7. メクズらによる碑文資料による補強

『アテナイ貢税表』から前449/8年度のリストの欠落<カッリアスの平和によってペルシア戦争が正式に終了し、デロス同盟の存在理由が無くなり、貢税は徴収されなかった。

Wade-Gery, 112はLapis Primusの空白のリストを前449/8年度のものとして結論し、カッリアスの平和が前450/49に入るとする。

#### 8. カッリアスの平和の問題点

##### A 信憑性について：

- (1) 前5世紀の史料に出てこなくて、前4世紀の状況の中で遡及される

Cartwrightによると、トゥキュディデスがカッリアスの平和に言及していないことがその実在性を否定する最大の根拠(p. 71)。

- (2) イソクラテスの『パネギュリコス』にはじめて言及される  
イソクラテスの方向性：スパルタの帝国政策を批判し、アテナイによる海上帝国の再建を訴える

アジアのギリシア人をペルシアに売り渡した『アンタルキダスの平和』に対して、ペルシアの行動を制限しアジアのギリシア人の自治を確保したデロス同盟時代のアテナイの功績を強調する

- (3) 前370年代のアテナイのプロパガンダとして使われる

テオポンポスが指摘するイオニア書体による平和条約文

- (4) 前4世紀の政治家や弁論家の常識となる

デモステネス、アンドキデスなど

A. W. Gomme, HCT. 1, Oxford 1972(2000rep.), 331f.は本物と見る

##### B 年代の問題

- (1) デイオドロスは前449年。しかし、デイオドロスは年代の正確さに問題があることは定評である
- (2) プルタルコスが前460年代を想定している。少なくとも前461年に暗殺されるエフィアルテスが『平和』締結後、将軍としてケドリュアイより外に遠征したがペルシア軍と遭遇しなかったことを伝えている。  
Badian (1987)は460年代中頃と想定

### C 内容の問題

- (1) 兵力の引き離し、ペルシアの領域制限、キプロスからのアテナイ軍の撤退については言及されているが、戦争状態の終了については明言されていない
- (2) アテナイ中心主義的な考え：スパルタを中心とするペロポネソス諸国の視点が欠落くペルシア戦争の中核を成したのがスパルタをはじめとするペロポネソス同盟諸国であったという事実が無視されている
- (3) 小アジア諸都市の二重帰属問題く自治項目の曖昧さ。自由ではなく自治はペロポネソス戦争以降の時期の用語
- (4) サモスの反乱におけるフェニキア艦隊来襲情報とピッスートネスの関与くカッリアスの平和に抵触
- (5) コロフォン、ノティオンへのピッスートネスの干渉とペルシア軍の存在くカッリアスの平和に反する行為だが、アテナイは別段ペルシアに抗議していないくカッリアスの平和の精神に反する  
(Cartwright, P. 74)

### 9. 古代ギリシア人の法観念

抽象的な「戦争状態の継続」という法観念が古代ギリシア人に存在していたのか

所有権：抽象的絶対的な所有権概念の欠如

具体的相対的な占有用益状態に基づく

戦争状態：領土に敵軍が居て、戦闘を交え破壊行為が加えられている  
という状態を指す

敵軍が撤退してもはや侵攻しなくなった場合、戦争は終了し  
たと扱われる

例 ボイオティア・スパルタ戦争＝マンティネアの戦いで  
終了とされる

何故ヘロドトスがセストス落城でその歴史を閉じているのか、何故トゥ  
キュディデスがニキアスの平和の時期を含めてペロポネソス戦争に一括し  
てしまったのか、何故クセノポンがマンティネアの戦いでその歴史を書  
き終えているのか、を考えてみる必要がある。

ヘロドトスにとって、セストス陥落によって大規模な戦闘が終了したと  
いう認識。

トゥキュディデスにとって、講和条約締結にも関わらず事実上戦争状態  
が継続していたという認識。

クセノポンにとって、最早ボイオティア軍の侵攻が繰り返されなくなっ  
てしまったという認識。

## 10. 現代人の常識と非常識

現代人も必ずしも厳密とは言えない

降伏が戦争の終了であって、講和条約が戦争の終了とは扱われていな  
い

例：第二次世界大戦の終結はいつか

- (1) ポツダム宣言の受諾(1945. 8. 15)
- (2) 方面軍毎の休戦協定の署名
- (3) ミズーリ艦上での無条件降伏文書正式署名(1945. 9. 1)
- (4) ソ連邦による停戦
- (5) サンフランシスコ講和条約締結(1951)
- (6) 同条約批准
- (7) 同条約発行(1952, 4)
- (8) 日ソ共同宣言(1956)

(9) 日中共同声明(1972)

(10) 国連憲章中の旧敵国条項が存在する限り第二次世界大戦は  
終わっていない

法理論上は(9)の日中共同宣言が発効し、日中間の戦争状態の終結  
が発効するまでは抽象的概念としての戦争は終了していないのではない  
か？

## 11. 結論

戦争状態の継続が必ずしも、戦争の継続にはならないとするなら、ペ  
ルシア戦争の終了を前479年とすることは必ずしも誤りとは言えない

## 参考文献

- E. Badian, "The Peace of Callias", *JHS* 107 (1987), 1-
- D. Cartwright, *A Historical Commentary on Thucydides, A Companion to Rex Warner's Penguin Translation*, Ann Arbor 1997.
- C. W. Fornara, *Translated Documents of Greece & Rome I, Archaic Times to the End of the Peloponnesian War*, Cambridge/ London/ New York et al. 1977(1983 2nd ed.)
- A. W. Gomme, *A Historical Commentary on Thucydides I*, Oxford 1953(2000rep.).
- G. F. Hill/ R. Meiggs & A. Andrewes, *Sources for Greek History between the Persian and Peloponnesian Wars*, Oxford 1987( 1966 new ed.).
- S. Hornblower, *A Commentary on Thucydides I*, Oxford 1991.
- R. Meiggs, *The Athenian Empire*, Oxford 1972.
- B. D. Meritt/ H. T. Wade-Gery/ M. F. MacGregor, *The Athenian Tribute Lists I-IV*, Princeton 1939-53.
- 鈴木雅也、「カリアスの平和とアテナイ貢税表」、『西洋古典学研究』3、1955、46～52頁。
- 師尾晶子、「前440年代の危機」は存在したか？ —トウキュディデス[50年史]再読—、『西洋古典学研究』46、1998、12～21頁。

ペルシア戦争が紀元前479年ではなく、紀元前449年に終わったとする説はカッリアスの平和によってペルシア戦争が正式に終了したという解釈の上に立って展開されている。しかしいわゆるカッリアスの平和についてはいろいろ問題点を含んでいて無批判に根拠として利用することはできない。まずその真贋性をめぐる問題がある。ついで年代をめぐる問題があり、さらにはその内容に関する問題もある。

(1)

C. W. Fornara, *Translated Documents*, 1 (1977(1983 2nd ed.)), Cambridge/London/New York/et al.

No. 60.

ペルシア戦争での戦死者を慰霊する碑文

(1～2行目)ペルシア戦争で倒れ半神としてこの地に横たわっている人たちの碑を、(2～4行目)高級神官のヘッラディオスが戦死した人々と町の名誉の為に文字を刻んだ。(4～5行目)シモニデスがそれを作成した。

(5～6行目)『ヘッラスとメガラの人々の自由の日を永らえる為にわれらは戦い、そして運命として死を受け入れた、(7～8行目)ある者たちははエウボイアとペリオンの下に、その地には弓を引くアルテミスの神域がある。(9行目)ある者たちはミュカレの山に、ある者たちはサラミスの前に、(10行目)ー欠ー(11～12行目)ある者たちはボイオティア人の野に、彼らは馬上から戦う者たちに敢えて手を掛けたのだ。(13～14行目)我らが同朋、[メガラの人々が、]われらをニサイア人の心やさしき広場にある祭壇の近くにこの名誉を与えてくれたのだ。』(15行目)今日にいたるまで町は半神たちに雄牛一頭をささげている。

この紀元後4ないしは5世紀のメガラ碑文はペルシア戦争で亡くなった戦死者を半神として称え、ニサイアにある祭壇の近くに碑文を建立したことを記している。7行目から14行目にかけてのエレゲイア調で記され、最後の15行目は散文である(p. 59, n. 2.)。10行目は石工あるいはヘッラディオスによって省かれたと考えられている(p. 59, n. 3.)。この碑文

で注目されるのはペルシア戦争の戦いとしてアルテミシオンの海戦、ミュカレの戦い、サラミスの海戦、プラタイアの戦いに限っていることであろう。紀元前478年に行なわれた摂政のパウサニ阿斯によるキプロスおよびビュザンティオンへの遠征は含まれず、紀元前480年から翌年にかけての一連の戦闘に限定されている。この碑文が紀元前5世紀のオリジナルを忠実に写しているのか、それとも後世の捏造であるのかは議論の余地があると思われるが、古代人がペルシア戦争をどのように考えていたのかを知る重要な手がかりを提供している。

(2)

プルタルコスはいわゆるカッリアスの平和（カッリアスの名前は言及されていない）を前467年（あるいは469年）のエウリュメドンの戦いのあとに置き、ペリクレスやエフィアルテスが将軍として遠征軍を指揮した前460年代後半よりは前のことと想定している（『キモン』、13節4）。

(3)

No. 95. M.

前449年にカッリアスの平和を想定するのはいわゆる「アテナイ貢税表」に当該年度（前449/8年）のリストが欠落していると言う前提の上に基づいている。しかし、この前提はいまだ確定しているとは限らない。碑文左側面にあるリストは前448/7年のリストであり、前面の最下部にあるのは前449/8年のリストだと言う意見もある。そしてこの意見に従うと欠損しているのは前447/6年のリストと言うことになる。さらにフォルナラは碑文には合計15のリストが入る空間があり、背面には5つのリストが復元されているが、6つの可能性もあるとすると「貢税表」には欠損したリストは存在しなくなる。

つまり「貢税表」に基づいた議論は史料的には確実とは言いきれないのである。

### 第三章 ペルシア戦争は自由のための戦争か

はじめに

ケンブリッジ古代史に引用されている J. S. ミルの言葉：

「マラトンの戦いは、英国史上の一つの事件としてすら、ヘースティン  
グスの戦いよりも重要である。もしその日の結果が違っていたら、ブリト  
ン人とサクソン人は今なお森の中を彷徨っていることになったであろう。」

馬場恵二氏の評価：

「〔(第二回)ペルシア戦争〕は、ギリシア世界に人間存在のすべての面にわたる大きな影響を与えた。なかでも重要なのは民族の自覚と表裏一体となった「自由」の発見である。」

世界史の教科書の評価：

「オリエント的専制に対する、ポリス市民の自由の勝利を意味した。」

伝統的評価に対する疑問

「自由のための戦い」であるという理念が同時代のギリシア人に共有されていたのかどうか。

何故なら、多くのギリシアのポリスがペルシア王の傘下に入るか或いはペルシアに対して好意的中立の立場を堅持。

近年の研究者（バルサーやヴァルザー）による疑問

一 古典的評価 ペルシアと戦ったギリシア人にとってペルシア戦争は「自由のための戦い」であった

テμισトクレスの決議碑文

「神々。評議会ならびに民会によって決議された、フレアリオイ区民ネオクレスの子テμισトクレスが提案した。町は、国土のため夷狄に対する保護と防衛のために、アテナイの守護者アテナならびにその他諸々の神々に

委ねられるべし。アテナイ人はこぞってならびにアテナイに住まいする外国人は婦女子を国土の建設者〔・・・21・・・〕トロイゼンに疎開させるべし。老人および動産はサラミスに留め置かれるべし。財務官ならびに女神官はアクロポリスに留まり神々の資産を守るべし。残りのアテナイ人はこぞってならびに成人に達した外国人は準備の整った二百隻の船に搭乗し自らのおよびその他のギリシア人の自由のために、ラケダイモン人、コリントス人、アイギナ人ならびに危機を共に分たんと欲する他の人々と協同して、夷狄を撃退すべし。数にして二百名、各船一人づつ、アテナイにある土地と家屋の所有者であり合法な子供らを有する者の中から、明日早朝將軍たちにより三段櫂船長の任命が為されるであろう。彼らは五十歳を超えざること、そして各人の船を籤により決定すべし。將軍たちは艦上戦闘員を二十歳以上三十歳までの成年男子より各船十名、弓兵を四名登録すべし。彼らはまた籤により三段櫂船長を任命するときに籤により船ごとに特任士官を任命すべし。残りの者たちの名簿は船ごとに將軍により告知版にアテナイ人に関してはレクシアルコスの登録簿より、外国人についてはポレマルコスにより登録された名簿より作成されるべし。彼らは組割りにより、二百組、各船百名配備して、彼らを書き留め、各組がどの三段櫂船に搭乗すべきなのかが分かるように、各組に三段櫂船、三段櫂船長、特任士官の名前を添付すべし。全ての組の配属が為され三段櫂船に割り当てられたときに、全能のゼウス、アテナ、ニケそれに安全の守り神ポセイドンに犠牲を捧げた後、二百隻全てが評議会ならびに將軍団の命令により兵員を配置せられるべし。船への兵員配置を完了したときに、それらのうち百隻で以て、エウボイアのアルテミシオンに向け支援を提供すべし、他方残りの百隻で以て、サラミスならびにアッティカの残りの地周辺にある船は錨泊して国土を警備すべし。和解の精神で以て全てのアテナイ人が夷狄を近寄せないということ十年間の追放刑を受けた者たちはサラミスに向かい、人々が彼らについて決定を下すまでその地に留まるべし。市民権を剥奪された者たちはその権利が回復されるべきこと。」

1958年、アメリカ人考古学者ジェイムソンによりトロイゼンで発見



1960年、ヘスペリア誌に発表

碑文の問題点：

- (1) 出土地がアテナイでなくトロイゼンであるという問題。
- (2) 使われている書体がアッティカ書体でなく、イオニア書体であるという問題。
- (3) 書式の問題：碑文の三行目に見られる書式、すなわち法案提案者の名前に父称（ネオクレスの子の (Neokléous)）や区名（プレアリオイ区民の (Phreárrios)）をつけるという書式、は前三五〇年以前のアテナイの文書には用いられていない
- (4) 用語の問題：前五世紀の碑文の用語としてアクロポリスを指すのに pólis という言葉が用いられるのに対して、碑文では akropólis という  
同時代の文書には用いられていない言葉が使用されている
- (5) ヘロドトスの記述と、この碑文の法案決議の時期やアルテミシオン並びに本国周辺の水域に出動する艦船の規模に関して一致していない
- (6) ヘロドトスによると疎開決議はテルモッピュライ／アルテミシオンの後  
碑文はアルテミシオンの前
- (7) アルテミシオンに派遣された艦隊の規模：  
ヘロドトス-127 隻、碑文-100 隻
- (8) アISKIネス贗作説：デモステネス：第十九番弁論『不実な使節について』  
「一体誰があの長くて見事な演説をぶち、ミルティアデスの（決議文）やテミストクレスの決議文（tò Themistokléous pséphism'）それにアグラウロスにおけるエフェーボスたちの誓いを読み上げたのだろうか。あの男（アイスキネス）ではなかったのか。」（三百三―三百四）
- (9) プルタルコス本物説：『テミストクレス』十節三  
「この提案が通って、ポリスをアテナイを守護し賜うアテーナに委ね、壮年にある全員が三段櫓船に搭乗し、子供たちや女性たちや奴隷たちを出来

る限り安全に疎開させるべきこと、という決議を提出したのである。」

碑文の内容検討：

(1) 提案者はテミストクレス

(2) ペルシア軍の来攻を前にして、アテナイの町を放棄し、非戦闘員ならびに財産の疎開を取り決めた後、十二行目から十八行目にかけて二百隻の三段櫓船に成人に達した全市民及び在留外人が搭乗してスパルタを中心とする同盟軍と共同してペルシア軍と決戦を交えることを宣言

(3) 市民等の配属と搭乗手続きが示された後、艦隊のうち半数はアルテミシオンに向けて出向すること、残りの半数は本土周辺の水域に留まって疎開作業を円滑に行なうために、警戒の任務につくことを指示

(4) 戦争目的：「我ら [ならびにその他のギリシア人の] 自由の [ために夷狄の民を] 撃退すべき [こと] (amynes [thai] t [òm bárbaron hypèr tês] eleutherías tês te heautôn [kai tôn àllon Helléon])」(十五～十六行目)

「自由のための(hypèr tês eleutherías)」戦いであると強調

その他の碑文資料：

トッド (M. N. Tod) の『ギリシア碑文選集』第二卷第二百四番の碑文：

「夷狄との戦いに移らんとするときにアテナイ人が誓った誓い。(Hókos hón ómosan Athenaíoi hóte émellon máchesthai pròs toûs barbàrous)」

(二十一～二十二行目)

「生きてある限り我は戦い、自由であることよりも生きてあることに重きを置かず、(Machóumai héos àn zô, kai ou' peri pléonos poiésomai

tò zên è tò eleútheros eínai.)」(二十三～二十四行目)

メクズ／ルウィス 『ギリシア碑文選集』第二十六番碑文：戦死者の墓碑

「ギリシア[の地]全土が隷属[の日々を見ること]のなきように(Hellá[da m]è pāsan doulio[n êmar idên])」。(四行目)

碑文資料の共通点：

『テミストクレスの決議碑文』も、『アカルナイのエフェーボス等の誓い』も、『アテナイ人の戦死者墓碑銘』も、ペルシア人との戦いが「自由のための戦い」であるという認識を共有

文献史料の評価：

ヘロドトス：自由防衛の戦いと認識

「大王の遠征はアテナイ人に対して進攻するという口実を掲げてはいたが、実際にはギリシア全土を目標としていた。(He dé stratelasia hé basiléos oúnomá mèn eích 『テミストクレスの伝記』 e hósep' Athénas elaúnei, katíeto dé es pásan tén Helláda.)」(第七巻百三十八節)

「それ故アテナイ人こそギリシアの救世主であったと述べたとしても真実の的を外すことにはならないであろう。(nún dè án tis légon sotéras genésthai tés Helládos ouk àn hamartánoi tò alethés.)」(百三十九節)

ペルシア戦争の目的が「ギリシアが自由であり続けること(tèn Helláda perieínai eleuthéren)」にあったと証言(百三十九節)

トゥキュディデス：ギリシア人の自由の危機と認識

「その後(即ち、マラトンの戦いから)十年目に夷狄は大軍を持ってギリシアの地を奴隷化せんと来攻したのであった。(dekátoi dè met' autèn aúthis ho bárbaros tói megáloi stóloi epì tèn Helláda doulosómenos êlthen.)」

(第一巻十八節二)

ネポス：解放戦争と認識

「一人の男(即ち、テミストクレス)の英知によってギリシアは解放され、ヨーロッパにアジアは屈したのである(Sic unius viri prudentia Graecia liberata est Europaeque succubuit Asia.)」(『テミストクレスの伝記』五節三)

ミルティアデスを「アテナイと全ギリシアを解放した (Athenas totamque Graeciam liberarat)」(『ミルティアデスの伝記』六節三)

古代の史料はペルシア戦争を「自由のための戦い」と位置付けるヨーロッパの長い知的伝統の出発点をなしている

現代の研究者：

ヒグネット：C. Hignett, *Xerxes' Invasion of Greece*. 1963.

「ペルシアに対する民族的抵抗 (the national resistance to Persia)」

「ギリシアの救済 (the salvation of Greece)」

ペルシア軍を「侵略者 (the invaders)」、ペルシア軍と戦ったギリシア人を「愛国的ギリシア人 (the patriotic Greeks)」と呼び、そのギリシア人たちの同盟を「国民連合 (the National League)」と表現

マリー：O. Murray, “The Ionian Revolt”, *CAH*. IV<sup>2nd ed.</sup>

イオニアの反乱鎮圧がペルシアとフェニキアによる地中海域征服の第一歩であった

ハモンド：N. G. L. Hammond, “The Expedition of Datis and Artaphernes”, *CAH*. IV<sup>2nd ed.</sup>, 1988.

マラ톤は単にアテナイとスパルタを庸懲するだけに留まらず、ギリシア全土の征服を目指したもの

クセルクセスの遠征は非常に大規模な遠征であったと評価される

バロン：J. P. Barron, “The Liberation of Greece”, *CAH*. IV<sup>2nd ed.</sup>

前四七九年度の戦いを「自由か或いは隷属」を意味するとギリシア人全てが認識していたと指摘

ベンクトゾン：H. Bengtson, *Griechische Geschichte*, 4 Auf. München, 1969.

クセルクセスの遠征を単なる辺境地帯における戦争ではなく、非常に大規模な征服戦争 (Eroberungskrieg) であり、単にギリシアの征服だけを視

野に入れていたのではなく、ギリシアの征服は全南東ヨーロッパ征服への第一段階に過ぎなかった、と評価＝「解放闘争 Freiheitskampf」

単なる解放闘争に留まらず:「それはギリシア人の物理的な存在のみをめぐる解放闘争ではなかった。敗北の場合には彼らに奴隷化と強制移住が確実であるということ、ギリシア人たちはよく知っていた。それ以上のもの、ギリシア人とギリシア民族の最高の財産、外的及び内的自由をめぐる、人間の品位をめぐる、国家的自立をめぐる―手短かに言えば、ギリシア人個人ならびにギリシア人全体の生活に価値と豊かさを与えてきたもの全てをめぐる、巨大な闘争であったのである。」＝ギリシア人の価値観、ひいてはヨーロッパ人の価値観をめぐる戦いでもあった

馬場恵二:『ペルシア戦争 自由のための戦い』、一九八二年、教育社。

解放戦争

著書の副題「自由のための戦い」や終章の題名「自由の勝利」

ペルシア戦争は「民族の自覚と表裏一体となった「自由」の発見」をギリシア人の間にその遺産として残した

二 修正史観 ペルシアはギリシアの自由への脅威とは見なされなかったユートナー (J. Jüthner)、バルサー (J. M. Balcer) やヴァルザー (G. Walser) の批判: 解放戦争としてのペルシア戦争史観は紀元前五世紀のアテナイで作られ、他のギリシア人がそのような見方に与していた訳ではなかった

ヴァルザー:ギリシア人であるということにはあらゆる自由、文化的優越、精神的独立、が含まれており、バルバロイの概念にはあらゆる種類の不自由、独裁政治、それに精神的劣等が含まれている。

前五世紀中頃のアテナイ社会に於いて侮蔑的なバルバロイ観が生まれた。

原因: 外国人や劣格市民には訴訟権が認められていなかった

アテナイに於ける市民と外国人との間の裁判が急増

結果：外国人に対する優越感と非市民に対する軽蔑観を生み出した  
バルバロイに対する差別的な概念は紀元前五世紀のアテナイの帝国主義と強く結び付いている

アテナイの用語法に他のポリスは従わず

スパルタ：ペルシアをバルバロイとは記さず、クセノイと記す  
親ペルシアとか反ペルシアとかの立場は党派的利害によって決定  
ペルシア戦争以前の時期に個々のポリスがどのように行動したのか  
スパルタの場合：ペロポネソス同盟を核に、アテナイなどのポリスを束ねて、同盟軍を指揮し、遂に勝利へと導いた

蛇碑文ではスパルタの名前が最初に言及  
スパルタに関して一つの神話が形成

ハモンド：スパルタはペルシアがエーゲ海域に姿を現したときからペルシアをギリシアにとっての脅威と見なし、首尾一貫してペルシアに対して敵対的であった

スミス：「スパルタは一つの非常に単純な対外政策を保持していた。

それは僭主に対する、民主政に対するそしてペルシアに対する敵意から成り立っていた。」

紀元前六世紀後半のスパルタの外交活動

全く理解に苦しむ材料を数多く提供し、しかも整合性を持たない  
最初のペルシアの脅威に晒されたイオニア人の救援要請に対して、「スパルタ人は全く耳を貸さずイオニア人には加勢しないということに合意  
イオニア人にも、サモスのマイアンドリオスにも、ミレトスのアリストゴラスにも、一兵の援軍も派遣していない

ズゾルト：クロイソスとの同盟に関して、スパルタがキュロスに対する同盟に積極的に関与する考えであったかは疑わしい

スパルタの関心はペロポネソスに限定されており、小アジアに対しては行動を抑制

クレイグ：ペルシアの膨張に対するスパルタの恐怖感を過大評価すべきではない

ペルシアへの恐怖感はスパルタにとって優先的な関心事ではなく、

スパルタの対外政策決定においてペルシアは重要な要因ではなかった

フッカーや新村：消極的な対ペルシア政策

フッカー：特にクレオメネス王の行動

サモスのマイアンドリオスの支援要請をクレオメネスが拒否したのは、ペルシアとの直接対決に引き込まれるのをためらったためイオニアの反乱を支援するのを拒否したのは、ペルシア帝国は余りにも強大であるのでギリシア本土から派遣される援軍では打ち破れないことを知っていたから

新村：クロイソスとの同盟時にスパルタはペルシアに対してはっきりとした意図などは持っていなかった

リュディア王国滅亡後は、ペルシアのエーゲ海域への進出を阻止することが対ペルシア政策の基本

スパルタ王クレオメネスはスパルタの防衛線をさらにギリシア本土近海にまで後退させた

ジョーンズ：このような消極的な対ペルシア政策の存在そのものすら否定

クレオメネスの関心はスパルタに限定されていて、迫り来るペルシアの脅威を無視

だからこそ、クレオメネスはサモスをペルシアに譲渡し、親ペルシア派のヒッピアスをアテナイの僭主に据えようとした

中井：ペルシア戦争期に入るまでスパルタには明確な反ペルシア政策は存在せず、また反ペルシア外交が展開されることもなかった

スパルタが反ペルシアの姿勢を確実に初めて鮮明にするのは、前四九一年、ダレイオス王が土と水の献上を要求する使節をギリシアに派遣したときであった。このときスパルタは、当時の国際儀礼を無視して使節を井戸の中に投げ込んで殺害

アテナイですら、初めてペルシアと敵対する決意を固めたのはサルディスの総督アルタプレネスが亡命中の僭主ヒッピアスの復帰要求を拒絶したとき＝前 500 年

スパルタもアテナイも、当初からペルシアを脅威と見なしていた訳ではなく、ペルシアの意思が自国の或いは自分たちの利害と一致しないことが明確になったときに、それも物理的な強制力によって押し付けられようとしたときに初めてペルシアに敵対する政策を採択

三 「自由のための戦い」はギリシア人全体に共有される戦争理念だったか

ヘルモクラテスの演説:「そして私の考えでは彼らはギリシア人の自由のためにペルシア軍と戦ったのでなければギリシア人が己自信のために戦ったのでもなく、それどころか彼らは自分たちに彼らを従属させるために戦ったのであり、ギリシア人は同じように愚かではなくより奸智に長けた支配者と交替させるために戦ったのだ。(kai ou peri tēs eleutherias ára oute hoûtoi tôn Hellénon outh' oi Hellénes tēs heautôn tōi Médoi antéstesan, peri dè hoi mèn sphísin allà mè ekeínoi katadulóseos, hoi d' epi despótou metabolêi ouk axynetotérou, kakoxynetotérou dé.)」  
スパルタとの同盟に加わってペルシアと戦ったポリスの数の僅少さ＝ペルシア戦争を「自由のための戦い」と位置付ける戦争理念を多くのギリシア人が共有していなかったことを示す

サラミスの海戦：スパルタ人、コリントス人、シキュオン人、エピダウロス人、トロイゼン人、ヘルミオネ人、アテナイ人、メガラ人、アムブラキア人、レウカス人、アイギナ人、カルキス人、エレトリア人、ケオス人、ナクソス人、ステュラ人、キュトノス人、セリポス人、シプノス人、メロス人、クロトン人（二十一の住民名）

プラタイアの戦い：スパルタ人、テゲア人、コリントス人、ポテイダイア人、アルカディアのオルコメノス人、シキュオン人、エピダウロス人、トロイゼン人、レブレオン人、ミュケナイ人、ティリュンス人、プレイウス人、ヘルミオネ人、エレトリア人、ステュラ人、カルキス人、アムブラキア人、レウカス人、アナクトリオン人、ケパレニアのパレ人、アイギナ人、メガラ人、プラタイア人、それにアテナイ人（二十四の住民）

『デルポイ奉納の鼎』碑文：三十一の住民



文献及び碑文の両史料とも「ギリシア人(hoi Hellenes)」と呼ばれる同盟軍がギリシア本土のごく一部しか代表していないことを示す

デルポイの神託：

1. 「内に槍を持ちて守りを固めて座し、その上で頭を守れ。頭は身体を無事に保つであらう。(kai kephalèn pephúlaxo. káre dè tò sôma saósei. )」

(アルゴスに対して)

2. 「幼稚な者どもじゃ、汝らがメネラオスに加勢したが故にミノスが怒りの余り悲嘆の涙を送りたることに苦情を申し立てるのか。彼らは彼の身に起きたカミコスでの殺害に対して共に報復しなかったのに、汝等は彼らに夷狄の男によってさらわれたスパルテーの女のため（報復に協力した）が故に。」(クレタの諸都市に対して)

3. 「悲惨な者どもよ、何故に座しおるや。地の涯に逃れ去るべし、住まいも車のごとく丸い町の城山の頂をも後に残して。頭も身体も確固として踏みとどまる能わず故に、足のつま先も手も、その間にあるものすべて、生き残りはせぬぞ、悲惨なる事態が起こる故にな。劫火と気性も激しいアレスが、シュリエー産の戦車を推し進めながら、それらを破壊しおるからじゃ。汝らの城砦だけではなくその他多くの城砦もまた破壊し、不死なる神々の多くの宮居をも恐ろしい劫火に委ねおるのじゃ、それらは今汗を滴れ落として立ち、恐れおののいて打ち震えておるぞ、最も高き屋根に、か黒き血が降り注ぎ、最悪の運命を予兆するなり。神殿より出でよ。凶兆に勇氣を押し広げよ。」(アテナイ人に対して)

4. 「汝等、広々としたスパルテーに住まいし者どもよ、その偉大で名高き町はペルセウスの裔の男どもによりて滅ぼされるか、あるいはさもなくば、ヘラクレスの血統に連なる王が殺されたるをラケダイモンの国の境は嘆き悲しむことになるぞ。何故なら牡牛の力、獅子の力も面と向かいては支えること能わざるからじゃ。ゼウスの力を持つ故にな。踏み留まるでないぞ。二者のうちどちらかを悉く喰らい尽くすまではな。」(スパルタ人に対して)

ヘロドトスの注釈：「多くの者が戦争に手を染めようとは望んではおらず、進んでペルシア方につこうとしていた。(óute bouloménon tôn pollôn

antáptesthai tou̓ poléμου, medizónton dè prothymos.)」

来攻するペルシア軍に対してこれに抗して戦おうとするポリスはごく少数であった。その理由はペルシア軍必勝の信念であった＝勝ち馬に乗る

#### 四 多くのポリスがペルシア軍に抵抗しなかった理由

ディオドロス：個々のポリスの「私的な安全 (ídios aspháleia)」が何よりも対外政策を決定する際の価値基準であった

自国の「安全」という理念を前にして、アテナイなどの同盟軍が掲げる「ギリシア人共通の自由 (koiné tôn Hellénon eleuthería)」などは色褪せたものになってしまう。

アテナイもスパルタも、最初からペルシア軍の来攻が自分たちを目標にするものであり、これと戦う以外自国の「安全」を保つ術がなかったが故に、同盟を結成し、その仲間を増やすためにプロパガンダとして「ギリシア人共通の自由」を標榜した

「ギリシア人共通の自由」というプロパガンダがほとんど有効性を持たなかった：同盟軍の町の数の少なさ

テミストクレスの呼びかけ：応えたのはナクソス船四隻とテノス船一隻のみ。「大部分はそのような行動にでなかった。(hoi dè pleúnes ou̓.)」

サモスのテオメストルとピュラコスサラミスの功績により、ペルシア王より、一人はサモスの独裁者に列せられ、もう一人は王の恩人として莫大な領土を付与された

シーリー (R. Sealey) によれば、ペルシアに加担することは多くのギリシア人にとって不名誉なことではなかった。それ故、ペルシアの宗主権を認めることに倫理的な罪悪感は伴わなかったのである。

#### 五 結論

ペルシア戦争を「自由のための戦い」と位置付けたのはこの時ペルシア軍と戦ったアテナイやスパルタなどの同盟軍に加わったポリスであった。しかし、多くのギリシアのポリスはこのような「自由のための戦い」とい

うプロパガンダには同調しなかったのである。彼らにとって自国の「安全」がすべてであって、「ギリシアの自由」は自国の「安全」と相反するものであった。従って、多くのポリスは自国の「安全」のために「自由のための戦い」に参加するのを拒んだのである。「自由のための戦い」はごく一握りのポリスの戦いであった。